

## 【論文】

## 60年代中国大学日本語教科書『日語』の編纂方針と教育思想

中国国家の教育方針・政策との比較をもとに

宮 琳\*

(東亜大学総合学術研究科・嘉興学院日本語学部)

## 概要

本研究では、1960年代中国で出版され大学で広く使用された日本語精読教科書・北京大学編『日語』（第一～三冊）を分析対象とし、採用された作品のジャンルや内容の特徴を分析、それを当時の国家の教育方針・政策と照合することで、1960年代の日本語精読教科書の編纂方針と内包された教育思想を明らかにした。公文書資料及び二通りの教科書分析を照合した結果、『日語』に採用された作品の多くは政治色が強く、日本語教育においても政治思想教育の階級性が強調されていた。また、採用作品では毒性のない子ども向けのもも多く、当時の国家政策に合った題材が選ばれていた。学習者の日本語能力レベルに適した作品を選択するという教科書編纂の原則に沿いながらも、政治性・思想性により重きを置いた作品が選ばれ、学習者には何よりもその政治性や思想性の理解が求められていた。

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 中国日本語教育, 精読教科書, 国家政策, 題材・ジャンルの特徴, 編纂方針

## 1. 研究の背景

中国の大学日本語専攻の主幹科目は日本語精読である。精読授業で使用される教科書は日本語教育に重要な内容を提供し、学習者の日本語能力を総合的に育てることに大きな役割を果たしている。外国語教育は国の政治、経済、社会からの要請と深く関わっているが、中国における日本語教育も同様で、各時代の日本語専攻対象の教科書は国の教育方針・政策に基づく教科書編纂方針によって変遷を遂げて

きた。中国の日本語精読教科書（以下、日本語教科書）の研究は1990年代以降の教科書については多くの研究が進められている（篠崎, 2006; 王, 2006）が、それ以前のもの、特に1960年代に焦点を絞った研究は少ない。また、本文や題材の分類を中心に研究が進められており（川上, 2011; 田中, 2014; 李, 2014）、具体的に教科書に採用された作品を思想面から分析した研究も少ない。1960年代は未だ日中国交回復前であり、日本からの教科書の供給はなかった。一方それまでのソ連からの翻訳教材は時代遅れとなり、中国人教師による自作教材が中心となっていた。このような状況下で国家の方針・政策

\* E-mail: gonhlinlin1@163.com

に従った新しい日本語教科書が整備され始めた時代であった。日本語教科書の編纂においては前の時代の教科書編纂方針や作品の選択基準等が後の時代の編纂に大きな影響を与える。1960年代の日本語教科書を分析することは中国教科書史の研究上、重要な意味を持つものと考えられる。

本研究では、公文書と日本語教科書の分析・対照を通して当時の国家政策・方針が教科書にどう反映されているか及び教科書に内包された教育思想を検討し、1960年代日本語教科書の編纂方針及び教育思想を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究対象と研究方法

本研究では、1960年代に発布された中国の高等教育、高等教育外国語教材編纂に関する公文書、及び1960年代に中国で出版された日本語教科書・北京大学編『日語』（第一～三冊）を分析対象とする。『日語』（第一～三冊）は中華人民共和国建国後、はじめて公式に出版された日本語専攻用の精読教材である。1964年までに『日語』（第一～三冊）の各冊の累計印刷数はそれぞれ20,550冊、19,740冊、13,000冊に達し、当時の中国の大学日本語専攻開設校の多くで使用され、北京大学のみならず全国の大学日本語教育において大きな役割を果たした。本研究では、この『日語』（第一～三冊）と公文書にみる国家の教育思想を比較・対照し、中国大学日本語教科書にどのように国家方針が反映されているかを解明する。

この目的のもとに以下の研究・分析方法をとった。

1. 当時の教科書編纂に係わる公文書の分析を行い、教科書編纂の方針を明らかにする。
2. 教科書の分析として総合分析および作品分析の二つの分析を行う。

(1) 総合分析：『日語』掲載作品を種類別、出典別、著者別、題材別、ジャンル別により

分類・集計し、教科書の全体的特徴をみる。

(2) 作品分析：(1)の分析結果に基づき分析対象作品を選定、作品の特徴的な記述を抽出・分析する。

3. 上記1, 2の結果を比較・対照し、日本語教科書に内包された教育思想及び教科書の編纂方針を明らかにする。

## 3. 60年代中国における教科書編纂の方針

### 3. 1. 60年代教科書編纂の時代的背景

#### 3. 1. 1. 中華人民共和国建国（1949年）～1950年代半ば

中華人民共和国建国後、中国政府は高等教育の発展に力を入れ、教材編纂に関する一連の公文書が公布された。1950年6月1日に、教育部<sup>1</sup>によって第1回全国高等教育大会が北京で開かれ、会議では『高等教育機関の課程改革の決定』（下記、『決定』と略す）が採択された。『決定』では高等教育の目標を「高度な文化レベルを持ち、現代の科学技術を身につけ、誠心誠意人民のために奉仕し、国家建設に必要な専門人材を育成すること」（馬, 1954, p. 18）と定められた。

続いて1951年3月に教育部は『高等教育機関教材編纂審査委員会暫定組織規定』を公布し、高等教育機関教材編纂審査委員会を設置した。そこで編纂審査の原則として①「正確な科学的な観点を持ち、愛国主義精神を堅持すること」、②「できるだけ実践と結びつき、国家建設事業の需要に対応すること」、③「課程改革で決定した精神に必ず沿い、複雑なものを簡潔化すること」<sup>2</sup>（中国教育年鑑編輯

<sup>1</sup> 「教育部」は日本の文部科学省に相当。

<sup>2</sup> 中文原文引用：编审原则要求：教材内容必须有正确的科学观点，贯彻爱国主义精神；必须尽量联系实际，切合国家建设工作的需要；必须贯彻课程改革决定的精神，符合精简原则。

部, 1984, pp. 509-510) があげられた。また, 教育部は中国の高等教育機関の文科<sup>3</sup>教科書が不足している現状を改善するため, 各高等教育機関にソ連教材の翻訳・編纂の計画を立てるよう要求した。1952年11月12日には, 「人手を集め, ソ連の高等教育機関の文科教科書及び授業用の参考書を翻訳する」, 「教師の参考のために, 授業に役立つソ連の教科書を写し印刷する」(中央教育科学研究所, 1984, p. 68) との指示が出され, 同年11月27日に『ソ連高等教育機関教材の翻訳についての暫定規定』において, 各大学で翻訳されたソ連教材の編纂計画が定められた。各大学で翻訳された原稿は教材審査委員会の許可を得て『教育部推薦高等教育機関教材試用本』(中央教育科学研究所, 1984, p. 68) として出版された。蘇(1980)も「(1950年代の)高校や大学の教科書はロシア語から翻訳されたもの」(p. 27, ( )内は筆者加筆)であったと指摘している。このように中華人民共和国成立初期の中国の高等教育機関で使用された教材は一般的にソ連教科書の翻訳本であった。しかし, 1953年5月, 高等教育部が中央政府に提出した報告書『全国高等教育の基本的な状況及び今後の方針と活動』(中文: 关于全国高等教育的基本情况和今后方针与工作的报告)では, ソ連の教育大綱, 教材を採用しても, 中国の現状と結びつけること, 及び系統性を考慮した上で適切に修正・削除を行うことが指示されている。

このように, 中華人民共和国成立後から教育部は頻繁に高等教育の教科書編纂に関する公文書を公布している。このことは教育部に指示する中国政府自体が高等教育の教科書編纂を重要視していることを示す。これらの政策のもとで, 中国の高等教育機関で使用される日本語教科書についてもソ連の教材が採用された。

しかし, 一方で, 「入手したソビエトのあまりに

も立ち遅れた日本語教科書は顧みられなかった」(孫, 1994, p. 81) との指摘もある。孫(1994)は「当時(1950年代)は既成の教材がなかったため, それぞれの大学でガリ版刷りのパンフレット教材が自編使用された」(p. 81, ( )内は筆者加筆)とも述べており, 各高等教育機関では, ソ連教科書に加え, 教師自身が教育経験を生かして編纂した自作教材も多く存在したことがうかがえる。

### 3. 1. 2. 1950年代後半～1960年

しかし, 1950年代後半に入ると, 中国政府内でソ連盲従主義への疑問が呈されるようになった。1958年, 毛沢東を中心に大規模な経済建設運動——大躍進運動が起こり, ソ連は当初これを支持する態度を示した(季, 2014, p. 289)。しかし, 1959年1月28日にフルシチョフは中ソ第21回大会の報告で, 中国の大躍進運動を直接には名指さない形で批判し(陳, 2001, p. 109), これに対し, 中国共産党及び毛沢東は反発, 中ソ間のイデオロギーの大論戦が起こった。これを契機にソ連は公然と大躍進運動に反対するようになった(沈, 2013, p. 111)。その結果, 1960年7月, ソ連政府は中国で建設指導をしていた1,390名の科学技術者を引き揚げさせ, 全ての設計図や資料を持ち帰ると発表した(中国新聞週刊1960年7月16日苏联撤走全部专家)。このため, 中国は独力で欧米の進んだ科学技術情報を入手する必要に迫られ, 外国語として, ロシア語のほかに, 英語, ドイツ語, フランス語, 日本語の受容が見直され始めた。

一方, 大躍進運動は中国の政治, 経済, 文化等に大きな影響を与えた。教育分野では教育革命<sup>4</sup>が行われ, 古い教育思想, 古い教育体制, 古い教学思想, 古い教育方法, 古い教材を打ち破ろうとした。

<sup>3</sup> 「文科」は文系科目を指す。主に, 国語, 歴史, 哲学, 政治, 政治経済学, 教育, 外国語などである。

<sup>4</sup> 「教育革命」は1958年から1960年までの間, 中国で行った教育改革であった。主に, 「教育改革」, 「教育を生産労働に結びつける」, 「働きながら勉学する」という3つの面を含む。

教学において学生の役割を強調し、教師の主導的な役割を否定した。教育内容は政治性、実用性重視の内容を増やし、教育は政治に奉仕することを強調した。教育機関では政治活動、生産活動が多く行われ、学習時間を確保できなかった。言語科では作品の翻訳、参考書等の編纂が行われたが、編纂された教材は「政治」、「現実」を重視し、政治的材料が中心になり、中国語に関する政治的文章の翻訳文が大きな割合を占めた。母語話者によって書かれた原文は極めて少なく、学習者は自然な外国語を身につけることができなかった<sup>5</sup> (李, 2009, pp.100-101)。

1960年になり、大躍進運動は終結した。しかし、その中で行われた教育革命での教学軽視による高等教育の混乱は大きく、中国政府は高等教育を見直す必要に迫られるようになった。これに伴い、日本語教材を含めた高等教育の教科書編纂が推進され、教育部等によって高等教育教科書編纂にかかる会議が数度にわたって開かれ、一連の公文書が公布された。次節以降では、この期に発行された公文書及び国家指導者の発言にみる教科書編纂の方針を検討する。

### 3. 2. 国家政府による高等教育機関に関する原則の策定

1958年から1960年までの大躍進運動のもとで進められた極端な教育革命は中国の高等教育の発展に障害をもたらした。1961年、中国政府は教育部に対し、高等教育の教育革命における正反両面の経験を総括させ、高等教育を整備するよう指示した。これに伴い、教育部は高等教育発展のための新たな方針の策定に取り掛かった。1961年3月に教育部副部長兼清華大学学長の蔣南翔をはじめ、呉畏等の教育

部幹部及び清華大学の教師等は『中華人民共和國教育部直屬高等教育機関暫定工作条例(草案)』(以下『高教条例』と略す)を起草した。『高教条例』では、高等教育は「共産主義的な人間を育てることを主要任務とすること」、「教学を重視すること」、「知識人政策を正しく執行すること」との原則を決定した。その後、『高教条例』は中央の指示を受けて広く意見を求め、検討・修訂された上で、同年9月15日に批准され、執行された。

『高教条例』の総則には、高等教育機関の基本任務、人材育成目標、学校教育の方針、知識人への対策等が規定されている。以下では、主に、『高教条例』に書かれた高等教育機関の教育方針、人材育成目標に関する部分を取り上げる(以下は筆者抜粋、筆者訳)。

1. 高等教育機関の教育方針：教育はプロレタリア政治に奉仕し、教育を生産や労働と結びつけるという方針を貫き、社会主義に必要とされる各種の専門的な人材を育成する。
2. 高等教育機関の人材育成目標：毛沢東の掲げたわれわれの教育方針は、教育を受ける者に徳育・智育・体育の各側面全てを成長させ、社会主義の自覚をもつ文化的な労働者にすることである。この方針に基づいて、高等教育機関は愛国主義や国際主義の精神を基本に共産主義の道徳的資質を持ち、共産党の指導や社会主義を支持し、社会主義事業及び人民のために奉仕する人材を育成すること。
3. 知識人への対応：高等教育機関において、必ず共産党の指導と共産党内外の協力を強化しなければならない。必ず知識人対策を実施し、全ての団結可能な教授、准教授、講師、助手やその他専門知識や技能を持つ人々と団結し、知識人の持つ全ての肯定的要素を引き出して、社会主義的高等教育機関の事業のために奉仕させなければならない。

<sup>5</sup> 中文原文引用：当時由于过分强调“政治”和“现实”，所编的教材以反映中国现实的政治性材料占主导地位，翻译文章占极大比重，原著比重极少，导致学生所学到的外语不够地道。

4. 自由な学術的議論の推奨：高等教育機関においては、必ず「百花斉放・百家争鳴」の方針を貫き、毛沢東が1957年2月27日に第11回最高国務会議で行った演説「人民内部の矛盾をただしく処理する問題について」の中で掲げた基準のもとに、教育の質、学術レベルを高めるために、各分野の学術的問題を自由に議論し、科学文化の進歩と繁栄を促進する。

以上から、『高教条例』では、毛沢東思想に基づき、共産主義的徳心を持って社会と人民に奉仕する専門的な人材の育成が目指されていたことがわかる。また、学生に限らず知識人として共産党と協力し、社会主義事業に奉仕することも強調されていた。教育方針としては、自由な学術的議論を促進することで、教育の質を高めようとしている。

### 3. 3. 高等教育教科書編纂方針

『高教条例』にみられる高等教育に対する方針を検討する中で、高等教育機関の教材についても会議が開かれた。

1961年2月10日、中国共産党中央政府書記処書記官の彭真は、高等教育機関の教材について当時中国中央宣伝部副部長であった周揚に教材編纂の主導を指示した。周揚は北京、上海の大学で使用されている教材を調査し、その調査結果をもって1961年4月11日～4月25日、北京で高等教育機関文科及び芸術院校教材編纂計画会議（以下、文科教材会議と略す）を開催した。4月12日、周揚は文科教材会議で、文科建設、教材編纂、指導方針等をめぐって「高等教育文科教材編纂について」<sup>6</sup>という報告を行った。この報告では教材編纂の方針、内容について以下のような記述がなされている（中国年鑑編集部、1984, pp. 512-513. 筆者抜粋、筆者訳）。

1. 中国が強い国になるには、科学技術とマルクス・レーニン主義が必要である。高等教育文科はマルクス主義理論を深く理解する人材の育成に大きな役割を果たす。文科は中国のマルクス主義学術の発展と深く関わっており、重要である。

2. 教材の編纂では、中国の革命・建設の経験をまとめ、中国の民族的文化遺産（文学遺産、哲学遺産、歴史遺産等）を整理すると同時に、外国の内容を批判的に受け入れる。

3. 教材の内容としては正面・反面の内容を含め、学習者は両面の内容を読み、知識を広げ、思想の硬化を防ぎ、独断の防止にも役立つ。「百花斉放・百家争鳴」がなければ、学術の発展に寄与できず、社会主義、共産主義の任務を果たすことは困難である。

以上から、教科書編纂方針として、マルクス・レーニン主義に基づく文科人材の育成が打ち出され、それに沿った思想性が強調された。内容としては中外・古今、正面・反面を含め、独断を防ぐためにバランスよく配置することが求められた。教育上、様々な意見に触れ、それをもとに活発な議論ができることが重視された。この周揚の報告をもとに、文科教材会議での検討を踏まえ、1962年5月、「高等教育文科教材の編纂状況及び今後の活動に関する報告」が中央宣伝部によって伝達された。

これにつづき、周揚は直ちに掲載作品選択の教材編纂にかかわる「三三制原則」を打ち出した。それは、一冊の教科書において社会主義・共産主義の思想内容に関する作品、民主主義的題材の作品（資本主義思想ではあるが、民主主義的な色彩の強いもの）、「毒性のない作品」<sup>7</sup>のそれぞれを3分の1ずつ掲載するというものであった（李、2009, p. 104）。この原則は外国語教材の編纂にも影響を及

<sup>6</sup> 「高等教育文科教材編纂について」の中国語原題は关于高等学校文科教材编选的意见である。

<sup>7</sup> 「毒性のない作品」とは中国の政治と軋轢が生じない作品を指す。

ぼすことになった。

### 3. 4. 外国語教材編纂の内容及び題材選定にかかわる方針

1961年7月1日、文科会議の決定方針のもとに、外国言語文学組<sup>8</sup>が中共中央宣伝部で周揚に外国言語文学専攻の教材編纂について報告した。この報告に対して周揚は外国語教材の編纂、外国語教育における政治思想教育と言語教育の関係、教科書に採用すべき作品の選択基準について次の観点を提示した(四川外国语学院高等教育研究所, 1993, pp. 70-71. 以下は筆者抜粋, 筆者訳)。

1. 政治思想教育と言語教育の関係：言語教育では政治的思想内容に多くの注意を払ってきたが、このことは正しいと言える。しかし、言語教育の教材が政治教育の教材へと変わってしまうことは間違っている。言語教育は思想教育における一つの重要な分野である。しかし、主要な目的は言語及び文学の精読・鑑賞・理解・応用の訓練にある。これが直接的な目的である。この目的を達成せずして、どうして政治の教育が大事だと言えようか。政治の教育は、教育の中で政治を語るということではない。言語を学習するということは、政治的に必要とされていることである。当然ながら、思想教育も必要である。しかし、これらは他の科目、例えばマルクス主義などの科目で行えば良いことである。
2. 教科書掲載作品の政治性：教科書は政治的に有益で、しかも芸術的に優れた作品を多く採用する。次に、政治性には欠けるが高い

芸術性<sup>9</sup>を備えたものを採用する。三番目に政治的に有害であっても必要性のあるものならば、その旨、解説を付して採用しても良い。

3. 思想性と芸術性：思想性と芸術性が統合されていることが重要である。従って、模範的な優れた文章を選ぶべきである。政治的文章は一定の割合に抑える必要がある。

さらに、1961年の文科会議後、同年、中国の「外语教育界」<sup>10</sup>は外国語教材編纂について会議を行い、外国語教材編纂について以下の三点を提示した(四川外国语学院高等教育研究所, 1993, pp. 72-73; 付, 1986, p. 146. 以下は筆者抜粋, 筆者訳)。

1. 政治と言語の関係：政治思想性は外国語教材で重視すべきである。しかし、掲載作品の一部、すなわち政治に関わる語彙等から判断・評価するのではなく、全体から理解すべきである。外国語の授業を政治の授業にしないように。政治思想的に良くかつ言語表現の自然な文章、及び言語表現的に良く思想が一般的な文章を多く選ぶ。最も重要なのは学習者に自然な外国語を身に付けさせることである。
2. 外国語教材と現実社会との繋がり：外国語教学は現実社会と大きく離れ、古典や欧米に関するものに偏向すべきではない。中国及び諸外国の現状を反映した材料を適切に選び、教材とする。
3. 原文と訳文について：現在の言語教育は訳文中心であるため、自然な外国語を学ぶこ

<sup>8</sup> 1961年文科教材会議の直後、専攻に応じ、14の教材編纂組が成立された。外国言語文学組はその中の一つである。

<sup>9</sup> 「芸術性」は1958年に毛沢東により「工作方法60条草案」のうちの37条で書かれた内容である。ここでの芸術性は主に正確性、鮮明性、躍動性(中文原文: 正确性, 鮮明性, 生动性)を指す。工作方法60条草案。<http://www.docin.com/p-524152460.html>

<sup>10</sup> 「外语教育界」とは外国語教育に従事する人たちあるいは外国語教育機構からなる組織を指す。

とができていない。学習者に外国語の自然な表現を身に付けさせるために、教材は原文を多く採用すべきである。

周揚は中国外国語教材の編纂において、言語教育における思想教育の必要性を認めつつも、前掲の「言語教育の教材が政治教育の教材へと変わってしまうことは間違っている」との発言にみられるように、言語教育がより重要であることを強調した。また、教材選択においては芸術性と思想性が統合されたものを選ぶよう指示している。外国語教育界の教材編纂の会議でも、政治思想の重視を確認すると同時に、外国語の授業を政治の授業にしないこと、自然な言語表現の作品を重視し教材の選択においては現実社会を反映するものを適切に選ぶこと、さらに、翻訳文ではなく、外国の原文を多く採用する必要性を提唱している。

両資料ともに、言語教育教材における政治思想の必要性を認める一方で、外国語教育では言語教育を重視する必要があることを述べている。以上から、思想の必要性を認めつつも、芸術性と思想性の統一、言語教育を重視し、言語表現の良いもの、外国の原文を多く採用することが当時の外国語教材編纂方針として認められる。

一方、当時の中国では国家指導者の発言も教育に大きな影響を与えていたと考えられる。当時の国家の指導層も外国語教育に強い関心を寄せていた。彼らの見解では、日本語を含めた外国語は単に政治闘争の道具とみなされた。当時の中国国務院副総理兼外交部部長の陳毅は北京第二外国語学院で演説を行い、その中で「外国語そのものは政治闘争の道具である。外国語を身につけて外国の長所を中国に紹介し、中国の革命闘争の経験を紹介していき、中国の革命の影響を拡大するとともに、帝国主義へ大きな打撃を与える」(陳, 1962, p. 4)と述べた。さらに、外国語教科書の内容については、陳は「文学作品を選ぶべきである」(陳, 1962, p. 4)との意見

も述べている。

また、この頃の外国語教科書は中国人が書いた時事的文章が多かったが、当時の周恩来総理・陳毅が延辺を視察した際、朝鮮族の人たちが延辺における朝鮮語教育について不満を述べたことをきっかけに、「(外国語教育では)母国語話者の文章が中心になるべきだ」との意見があったという。そして「それは、北京大学で1957年<sup>11</sup>から使用されるようになった教科書(『日語』第一・二・三冊編著者、陳信徳・張京先・鄭敬堂・徐昌華<sup>12</sup>、商務院書館(原文ママ))にも反映されたという」(佐治, 1991, pp. 379-380)。

### 3. 5. 60年代中国における教科書編纂方針のまとめ

中華人民共和国建国後、中国政府は高等教育の発展に力を入れた。高等教育の人材育成方針については、「共産主義的道徳心を持って社会に奉仕する専門的な人材の育成」、「知識人として共産党と協力し社会事業に奉仕する」ことがあげられた。教育方法としては、自由な学術討論を促進し、教育の質を高めることが目指された。この高等教育の方針をもとに、高等教育教科書編纂方針としては、マルクス・レーニン主義に基づく文科人材の育成方針に沿った思想性が強調されるとともに、編纂内容は中外・古今、正面・反面バランスよく配置することで教育上、活発な議論ができることが重視された。この高等教育教科書編纂方針の影響を受け、外国語教科書編纂は、教科書の掲載作品の思想性の必要を認めつつも、思想性と芸術性の統一、言語教育重視のもとに自然な言語表現の作品、外国の原文を多く採用する

<sup>11</sup> 『日語』初版の発行年は1963年である。1957年発行とされている根拠は不明。

<sup>12</sup> 編纂者4人とも北京大学の日本語教師である。『日語』の表紙には北京大学日語教研室編と書かれており、個人名は記載されていない。よって本稿では編者は北京大学とした。

ことが方針として定められた。また、国家の指導者からは文学作品、原文の重視もあげられた。

#### 4. 中国大学日本語精読教科書の総合分析

##### 4. 1. 日本語精読教科書『日語』（第一～三冊）の概要と分析対象

1963年に刊行された『日語』（第一～三冊）は中華人民共和国建国後、初めて公式に出版された日本語専攻用の精読教材である。学習対象者は日本語専攻1, 2年生で、学習レベルは初級前期～中級前期であった。1課の構成は、新出単語、文法説明、課文（本文）、練習、会話、課外閲読からなる。単語の説明、文型・文法の解説部分には中国語が用いられているが、その使用はできるかぎり制限されていることがうかがえる。本研究では最も教科書の編纂方針を反映しやすい教科書の「課文」・「課外閲読」に掲載された作品を分析対象とした。

##### 4. 2. 総合分析：日本語精読教科書『日語』（第一～三冊）の作品選定の特徴

本分析では教科書掲載作品を種類別、出典別、著者別、題材別、ジャンル別に分類・集計し、教科書掲載作品の全体の特徴を明らかにした。

分析方法として以下の手順をとった。

分析1：「課文」・「課外閲読」に採用された全47作品を掲載作品の種類、出典、出版年、著者という4つの面から分類することによって教科書掲載作品の選定上の特徴をみる。

分析2：日本の図書十進分類法に基づき、掲載作品の題材、ジャンルの特徴をみる。

教科書掲載作品は種類別に、中国人による書き下ろし文章、中国人によって中国語原文から翻訳された作品、日本人による原文からなっている。図1に示すように、各種類の『日語』（第一～三冊）全体での作品数及び割合はそれぞれ12作品（25.5%）、8作品（17%）、27作品（57.5%）である。日本人による原文作品が圧倒的に多くなっている。

出典別では、第一冊～第三冊全体では、日本の小・中学校用国語教科書からのものが13作品で、教科書掲載作品全体の27.7%を占めている。各冊を比較すると、日本語の初学者から学習時間200時間程度までの学習者を対象とする第一冊では小学校のものが多く、レベルが上がるに従い中学校のものが多くなっている。教科書以外の日本人による原文作品は学習レベルが上がるに従って増え、全体では14作品となっており、作品全体の29.8%を占める。主に著名な作家の作品集、日本共産党の機関紙『赤旗』から採用されたものが多い。

一方、中国人が日本語で書き下ろした文章は第一

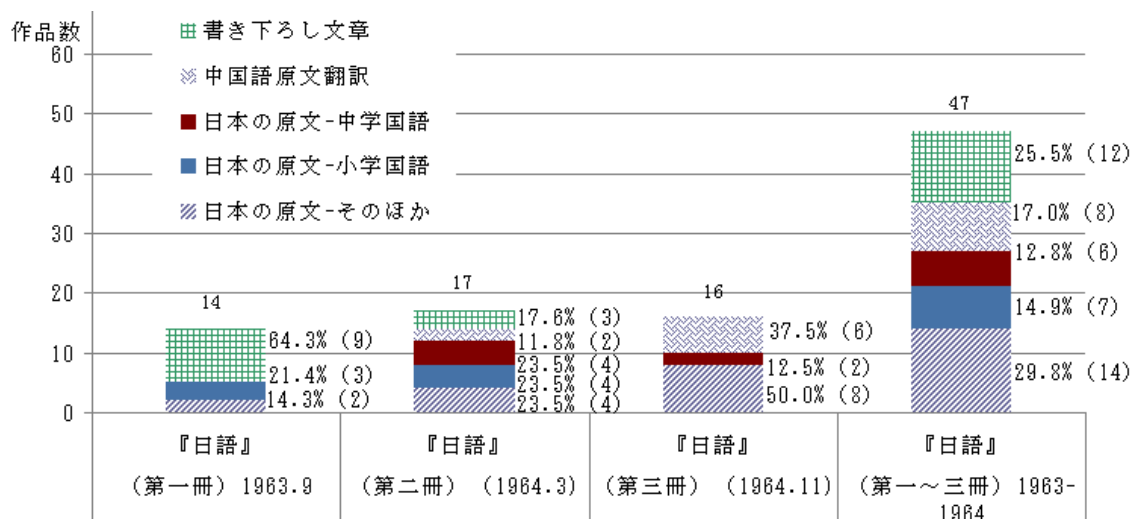


図1. 『日語』（第一～三冊）における掲載作品の種類、出典、作品数と割合：（ ）内は作品数。



冊で多く、学習者のレベルが上がるに従い徐々に減少している。これらの文章の出典は書かれていない。逆に、中国語原文から日本語に翻訳された作品は学習者のレベルが上がるに従い、次第に増加している。その出典は『毛沢東選集』、『解放日報』、『中国画報』等からのものが多く採用されている。

出版年では、中国の翻訳作品は1960年代前後の作品は2作品だけあり、1930～1940年代のやや古い作品が多くみられる。日本語原文については1960年前後の作品が日本語原文作品全27作品中19作品であり、最新の作品を積極的に採用していたと言える。

著者別では、日本人では志賀直哉等の著名な小説家や文化人、児童文学者がみられる一方、日本共産党の指導者であった野坂参三、日本のプロレタリア文学作家の小林多喜二、江馬修の作品も多い。それに対し、中国人の作家では毛沢東、朱徳などの政治思想的リーダーや郭沫若、謝冰心等の日中友好の仕事に携わっている人物の作品が多かった。中国共産党の事業に奉仕する人物の作品をより多く選択していたことがうかがえる。

以上から、教科書『日語』の掲載作品選定の特徴として以下の点が指摘される。

1. 日本人による原文作品を重視する傾向があり、特に第二～三冊では顕著である。
2. 簡単なもの（日本の小・中学校用国語教科書所収作品）から難しいもの（日本人作家の作品等）へと題材を配列するなど、学習者の日本語レベルに配慮した作品の種類、出典の配置が意図されている。
3. できるだけ最新の日本の作品を使用しようと思図していたことがうかがえる。
4. 中国の政治思想的指導者の作品、日本のプロレタリア文学や中国共産党に協力的であるとみられる作者の作品等、政治性を重視する傾向が強い。

#### 4. 3. 日本語精読教科書『日語』（第一～三冊）における題材の特徴

次に教科書掲載作品の題材を検討するため、日本十進分類法<sup>13</sup>の類目表（新訂10版の第1次区分表、2014年12月発行）に基づき作品を分類、集計した。

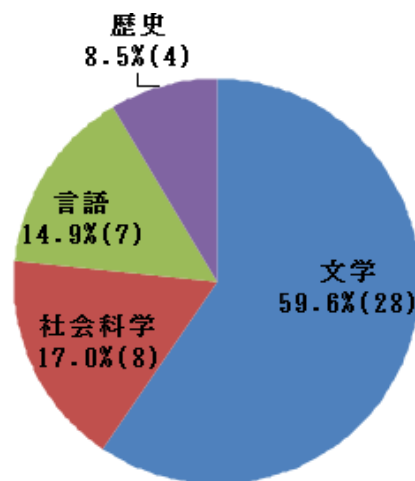


図2. 『日語』（第一～三冊）題材別分類：( )内は作品数。

『日語』（第一～三冊）に掲載された作品を十進分類法の類目表に基づき、第一次区分によって分類した結果を図2に示した。全47作品中、「文学」28作品（59.6%）、「社会科学」8作品（17%）、「言語」7作品（14.9%）、「歴史」4作品（8.5%）となっており、題材として文学が圧倒的に多くを占めている。

より詳細な特徴を見るため、日本十進分類法綱目表に基づき、第二次区分により再区分した結果を図3に示す。全47作品中、「日本文学」15作品（32.0%）、「中国文学」12作品（25.5%）、「日本語」7作品（14.9%）、「風俗習慣」6作品（12.8%）、「伝記」4作品（8.5%）、続いて「ソビエト文学」、「政治」、「経済」各1作品（2.1%）である。

<sup>13</sup> 木下、小川（2005, p. 221）は日本十進分類法をその時代における知識総体の体系的理解を示すのに最も適当な分類基準であると述べている。

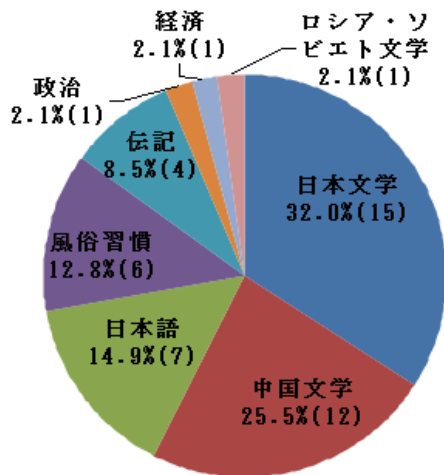


図3. 『日語』（第一～三冊）題材別再分類：（ ）内は作品数。

題材の特徴として、日本文学と中国文学が多く占めていることがあげられる。次いで多いのは「日本語」であるが、風俗習慣、歴史伝記が多いことも、特徴的である。「風俗習慣」, 「伝記」に分類された作品としては、人間が善悪の判断基準を持つことの必要を主張した明代・馬中錫の『中山狼伝』をもとに書き下ろした「東郭先生と狼」, 社会主義建設に協力的だった人物の伝記「徳田球一同志を思う」(野坂参三) 等がある。いずれも当時の政治的状況を示すものであり、そこに思想性が込められていることがうかがえる。

最も多かった「日本文学」「中国文学」の特徴をさらに詳しくみるため、十進分類法の要目表に基づき、再区分し、そのジャンルの特徴をみた(図4)。図4にみるように、日本文学のジャンルは「小説・物語」が最も多く8作品で、全47作品のうち17%を占めている。続いて、「評論・エッセイ・随筆」4作品(8.7%), 「日記・書簡・紀行」3作品(6.3%)となっている。「小説・物語」の作品として「新聞をくばる子どもたち」(鬼頭礼藏編, 著者不明『緑のこどもたち』1959年版所収), 「菜の花と小娘」(志賀直哉『志賀直哉集』所収)などの児童文学作品があげられる。中国文学のジャンルは「評論・エッセイ・随筆」が6作品で全体の12.8%

を占め、続いて「小説・物語」4作品(8.5%), 「日記・書簡・紀行」1作品(2.1%), 「記録・手記・ルポルタージュ」1作品(2.1%)であった。「評論・エッセイ・随筆」の作品例として「知識人の問題」(毛沢東「人民内部の矛盾をただしく処理する問題について」からの抜粋), 「母の思い出(一)」(朱徳『解放日報』1944, pp. 4-5)がある。

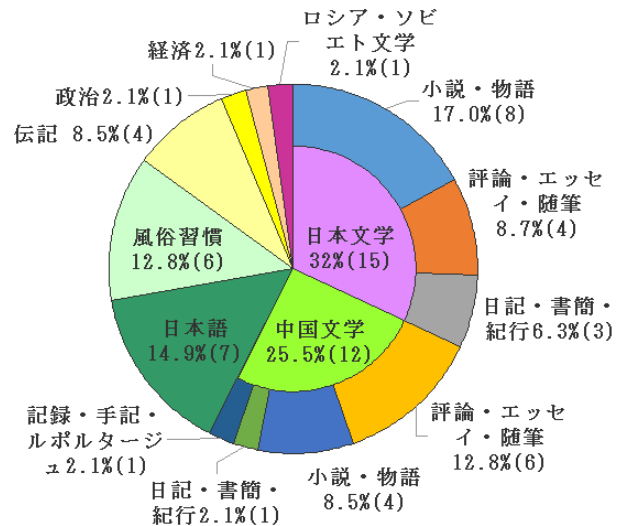


図4. 『日語』（第一～三冊）における「日本文学」・「中国文学」の下位分類：（ ）内は作品数。

以上から、教科書『日語』の掲載作品の題材の特徴としては以下の点が指摘される。

1. 掲載作品の題材において「文学」が最も大きな割合を占めていた。
2. 風俗習慣, 伝記が多く、その中には、政治性や思想性の強いものが多い。
3. 日本文学では「小説・物語」, 中国文学では「評論・エッセイ・随筆」が大きな割合を占める。
4. 日本語精読教科書総合分析のまとめ

以上の総合分析から、次の3点が1960年代中国大学日本語精読教科書『日語』の作品選定、題材の特徴として指摘される。

1. 言語レベルに配慮した作品の種類、出典：『日語』では学習者の日本語レベルに応じ、初級段階である第一～二冊では中国人による日本語書き下ろし文、日本の小・中学校国語教科書の作品が多く、段階的に中国語作品の翻訳文、日本人作家の作品集等からのものが増えており、言語レベルに配慮した作品配置がなされていた。

2. 題材としての文学の重視：題材では文学が半数以上を占めていた。文学の中では日本文学の場合は小説・物語が多く、その内容は子ども向けの物語的作品であった。これらの作品が採用されたのはストーリーがより単純でわかりやすくかつ深い教育的意味を持つものであり、日本語能力がまだ十分でない中国人学習者が日本文学に親しみ、高学年段階での日本文学の鑑賞に寄与すると考えられたためであろう。中国文学の場合は評論・エッセイ・随筆が大きな割合を占めていた。

3. 思想重視の傾向：前述のように中国文学で大きな割合を占めていた評論・エッセイ・随筆では、中国の国家指導者が中国革命建設の事業を宣伝する内容や「母の思い出」のような英雄的人物を賛美するために書かれた随筆が多く採り入れられていた。また、掲載作品は中国の政治思想と軋轢が生じない作品が選ばれ、その出典は宣伝機関紙や思想的な作家の作品が多い。さらに、歴史上の社会主義的な人物が伝記で取り上げられているなど、思想重視の傾向が強い。これは公文書で教科書編纂の原則としてあげられていた言語教育と思想教育の統合という点が反映されていることがうかがえる。

## 5. 教科書掲載作品分析

### 5. 1. 分析対象の選定と分析方法

前節の総合分析から、教科書の題材では日本文学、中国文学が多く占めていた。日本文学では小説・物語が最も多く、その中では志賀直哉のものが

3 作品で最多であった。そこで本稿では志賀直哉作品の一つ「菜の花と小娘」(『日語』第三冊第8課, pp. 174-179) を分析対象とする。また、もう1つの分析対象として志賀直哉作品以外で、かつ異なる日本語学習レベルの学習者を対象とした第一冊に掲載された鬼頭礼藏編(著者不明)「新聞をくばる子どもたち」(『日語』第一冊第12課, pp. 205-208) を分析対象とした。

一方、中国文学では評論・エッセイ・随筆が最も多く、うち、毛沢東、朱徳<sup>14</sup>の作品が各一作品であった。本稿では『日語』で初めて出現する中国語原文翻訳作品「知識人の問題」(『日語』第二冊第22課, pp. 217-220) を分析対象とする。また、「評論」と「エッセイ・随筆」では文体が異なると考えられるため、「エッセイ・随筆」のものとして、朱徳著「母の思い出(二)」(『日語』第三冊第3課, pp. 65-69) を分析対象とする。

分析方法として以下の手順をとった。

1. 作品を数度にわたって通読し、本論 3. での教科書編纂方針・原則と照合しながら、作品の特徴的な記述を抽出、分析する。
2. 作品に当時の教育思想がどう反映されているかを検討する。

### 5. 2. 日本文学の作品分析

#### 5. 2. 1. 「菜の花と小娘」

##### 5. 2. 1. 1. 「菜の花と小娘」の概要

「菜の花と小娘」は志賀直哉の第三の処女作(宮越, 1998, p. 102) として知られており、菜の花と小娘の交流をめぐって童話風なスケッチで擬人法を用いて書かれた小説である。小娘が山で雑草の中に一本だけで咲く菜の花から仲間の多い麓の村へ連れていってくれるよう頼まれ、様々な苦勞の末に、大

<sup>14</sup> 朱徳の書いた作品は『母の思い出』である。しかし、文章が長いので2課にわけて掲載された。本研究はそれを一作品とカウントした。

勢の仲間が生えているところに連れて行ってやったというストーリーである。

#### 5. 2. 1. 2. 分析結果

5. 1. の分析手順によって「菜の花と小娘」を分析した結果、作品に反映された教育思想として以下の4点が抽出された。

1. 個人の集団への依存：菜の花と小娘という作品の冒頭部には「それは雑草の中からただ一本、わずかに首を差し出している小さい菜の花でした」（『日語』第三冊第8課, p. 175）と書かれており、菜の花は自己を仲間から離れた山で暮らしている不幸な存在だと感じている。しかし、作品の最後では、菜の花は「おおぜいのなかまとなかよく、幸せに暮らす身となりました」（『日語』第三冊第8課, p. 179）と書かれており、菜の花は集団に帰ることで幸せな生活を送るようになったことがわかる。ここから、個人と集団の関連性が読み取れる。教科書編纂者がこの作品を選んだのは集団の中で暮らす個人は幸せであるとする当時の中国の教育思想、即ち毛沢東の唱えた集団主義精神に合致していたからではないだろうか。さらに、この考えは集団の利益を重視するという中国の伝統的な思想とも合致している。

2. 同情心・人間性の重要性：菜の花と小娘で、菜の花の運命の転換点となったのは小娘の同情心に基づく援助である。それは菜の花の仲間の多い隣の村へ連れて行ってくださいという訴えを聞いた小娘が「静かにそれを根から抜いてやりました。そしてそれを手に持って山路を村の方へとくだっていきました」（『日語』第三冊第8課, pp. 175-176）という具体的な行為をとることで実行された。「静かに」「手に持って」という描写を通し、小娘が菜の花の命を大切に扱っている人道的な人物像として明確に描かれている。ここでは、小娘の優しく人助けに熱心で、思いやりのある人というイメージが浮き彫りにされている。小娘は菜の花を人間と同じように扱

い、人間の傲慢さや植物への蔑視を示さない。こうして菜の花と小娘の交流が展開していくのである。このような優しい小娘の特性の設定を通して日本語教育において学習者に人間性教育を行おうとする一面もみられる。これは3. で取り上げた高等教育機関方針である共産主義の道徳的資質を持ち、人民に心から奉仕するという教育方針と一致していると言える。

3. 芸術性：また、この小説は、最初は菜の花が寂しく死滅の危機に直面しながら、優しい小娘のおかげで多くの困難を乗り越え、最後には大勢の仲間のいるところで幸せになるというハッピーエンドを迎える。読者は読む過程において最後まで緊張感を持って、小説の面白さを味わえる。「菜の花と小娘」は向日性<sup>15</sup>に支えられた志賀文学の特徴をもつ芸術性の高い作品である。この小説によって、学習者は小娘のヒューマニスティックな人格的魅力を体験すると同時に、短編小説の神様と称される志賀直哉の的確な文章描写力及び創作手法も学ぶことができる。

4. レベルへの配慮：一方、「菜の花と小娘」は当時の日本の中学1年生用国語教科書に掲載されている作品である。中国の大学2年生にとって知的なレベルを考えると、相応しいかどうか疑問はあるが、学習者の日本語レベルを配慮した作品選択と言える。また、学習者は初級段階から日本の素晴らしい芸術性の高い作品に接することを通して、高学年段階での日本文学鑑賞能力の基礎の育成にも繋がる。

#### 5. 2. 2. 「新聞をくばる子どもたち」

5. 2. 2. 1. 「新聞をくばる子どもたち」の概要  
北海道を舞台に、村の人たちに新聞を配達することを日課としている子どもたちが、早朝に起き、互い協力しながら、できるだけ早く村の人たちに新聞を届けようとする子どもたちの様子を描写した作品

<sup>15</sup>「向日性」とは明るい方向に向かう性質、素直で明るい性質を言う。

である。

#### 5. 2. 2. 2. 分析結果

5. 1. の分析手順によって「新聞をくばる子どもたち」を分析した結果、作品に反映された教育思想として以下の5点が抽出された。

1. 仕事に対する強い意気込みと熱心さ：この作品では全編を通じて子どもたちの集まる様子を「かけあして橋のたもとへ急ぐ」「かけおりに来る」「トラックがまきおこした土けむりが消えないうちに、子どもたちは新聞たばをひろって」「たったと橋の上を走っていく」(『日語』第一冊第12課, pp. 206-207) という表現を用いて、子どもたちが熱心に意気込んで仕事にのぞむ姿が描写されている。

このような労働に対する子どもたちの意気込みを描いた作品を用いたことは3. 2. で示された国家政府による高等教育機関に関する原則の策定での「教育を生産や労働と結びつける」という教育方針と一致していることがうかがえる。

2. 団結と協同の重要性：作品では子どもたちが団結して仕事に取り組む姿が描かれている。子どもたちが出会うと、「向うが手をふって」といって、「こちらも走りながら手をふる」(『日語』第一冊第12課, p. 206) というような仲の良い様子が描写されている。また、新聞の数を数える作業では、「みんな数がありましたか」「あいましたよ」「あいました」「ではみんなでくばりましょう」「行きましょう」(『日語』第一冊第12課, p. 207) のように声を合わせながら、同じ仕事をする仲間として仲良く協力し合い、仕事を達成する様子が描かれている。そして、この集団での作業の結果、今までは「ひるすぎにしか来なかった新聞が、いつも朝のうちに手にはいるようになったのである」(『日語』第一冊第12課, p. 207) という成果を生み出した。これは、第3節での「人々と団結」という教育方針と一致し、団結の重要性を伝えるのに役立つ作品である。中国人民は団結し、共産党及び社会主義事業に

従事すれば、時代から授かった使命を必ず成し遂げることができ、素晴らしい国を作り上げることができるといふ思想を日本語教育においても学習者に伝えるものであると言えるだろう。

3. 奉仕の精神と豊かな人間性：この作品全体から、子どもたちが人に奉仕することを楽しんでいることがうかがえる。寒地での早朝の新聞配達は無労働であるにもかかわらず、子どもたちは

「山道を元気よくおりに」「はれやかな顔」「ほがらかに話したり笑ったり」等をしている。このような子どもたちの元気な姿の描写から、子どもたちは明るく、人を助けることが好きな様子が浮き彫りにされていた。また、村の人は「ありがとう。ごろうさま。新聞を取ろうと出てみると、子どもはもうつぎのうちのほうへ走り去っている」(『日語』第一冊第12課, p. 207) の記述があるように、子どもたちは、感謝の言葉や報酬を求めることなく、喜んで人を助けていることがうかがえる。これは志賀直哉の分析でも取り上げた人民を心から奉仕するという教育方針と一致するとともに、人間としての明るさも強調されている。

4. 芸術性：この作品では新聞をくばる子どもが偉いとか素晴らしいといった直接的な表現を使用することなく、活写法を用いて新聞をくばる子どもたちの様子が目の前にいるように生き生きと描写されている。このような技法の使用は、純粹で、真面目で、人を助けることが好きで、思いやりのある子ども像を浮き彫りにし、読み手に強い印象が残る。この点で芸術性の高い作品と言える。

5. レベルへの配慮：「新聞をくばる子どもたち」は日本の子どもむけの作品である。『日語』第一冊を使用する中国の大学一年生の知的なレベルを考えれば、相応しいかどうか疑問がある。しかし、学習時間100時間程度という日本語レベルを配慮したうえで選択された作品であると言える。使用されている語彙、表現、文型ともに日常生活でよく使用

されるものであり、理解が容易であると考えられる。

### 5. 2. 3. 日本文学作品の分析結果

両作品はともに教育部の教育思想に合致する作品であった。また、日本の小・中国語教科書の掲載作品を用いている点では、日本語レベルに配慮したものととらえられ、言語学習を重視すべきという教育方針に従うものでもある。しかし、日本の子どもの言葉を大学生に教えることは大学生の知的レベルに沿ったものとは言いがたい。さらに、教育部の方針では学習者を生の日本語により多く接させるようにという教育方針があげられていたが、大学生にとっての「生の日本語」とは成人の日本語であるべきであり、子どもの日本語は果たしてその目的に沿っているかどうか疑問がある。

以上の日本文学作品の作品分析から、分析対象とした教科書掲載作品は教育部の方針以上に思想が重視されており、言語教育をより重視するという教育方針とはずれが生じていたと言えるだろう。

## 5. 3. 中国文学の作品分析

### 5. 3. 1. 「知識人の問題」

#### 5. 3. 1. 1. 「知識人の問題」の概要

知識人の問題は1956年1月14日～1月20日に北京で開かれた「知識人の問題」に関する会議において毛沢東が行った演説の一部である。その概要は主に、知識人を団結し、彼らの才能を発揮させ、社会主義建設に奉仕しなければならない。しかし、知識人は政治教育を受け入れるべきだというものである。

#### 5. 3. 1. 2. 分析結果

5. 1. の分析手順によって「知識人の問題」を分析した結果、作品に反映された教育思想として以下の3点が抽出された。

1. 社会主義建設事業における知識人の必要性：毛沢東、周恩来等の国家指導者は頻繁に知識人に関

する演説を行ったが、教科書『日語』には「我が国の極めて困難な社会主義建設の事業はできるだけ多くの知識人がそれに奉仕することを必要とする」（『日語』第二冊第22課, p. 218）との演説の一節が掲載されており、国家指導者は知識人を重視し、知識人は社会主義建設の事業に欠かせない存在であるということが日本語の教科書においても主張されている。

2. ブルジョア的な世界観の変換とマルクス主義の学習の必要性：作品にはまた、「わが国の知識人はひきつづき前進し、自分の仕事や学習のなかで次第に共産主義の世界観をうちたて、マルクス＝レーニン主義を学習し、労働者・農民と一体となって進み、途中でたちどまらず、なおさら後戻りなどしないよう希望する。大量の知識人がその世界観を改める必要が生じてきた」（『日語』第二冊第22課, pp. 218-219）とあり、知識人にブルジョア的な世界観を捨てるよう促すという知識人への政治思想教育の一面もみられる。さらに、世界の科学先進国のレベルに追いつくように、党員は科学知識の学習に努め、党外の知識人と団結し豊かな強国を作るよう呼びかけている。

知識人の重視については、国家指導者は演説を行っただけではなく、教育部直属高等教育機関の実施内容として法案を立てた。毛沢東のこの文章には、社会主義建設、マルクス＝レーニン主義、共産主義の世界観等の政治的な固有名詞や表現が多く、語彙、表現学習の上で偏りがある。この作品を使用することで、学習者に日本語知識を学習させると同時に正しい政治思想を身に付けさせ、社会主義に奉仕させようとする愛国教育の意図が読み取れる。

3. 言語教育と思想教育の比重：更に、作品には中国語原文を日本語に翻訳した場合に多用された「知識人はひきつづき前進し、労働者・農民と一体となって進み」のような翻訳調の表現使用が多い。これを蘇（1980）は、「中国的日本語」（蘇，1980，

p. 36) と呼び批判している。このような文章を通しては、学習者が自然な日本語を身に付けることは難しいのではないだろうか。このことから、言語教育よりも思想教育の方を重視していることがうかがえる。

### 5. 3. 2. 「母の思い出 (二)」

#### 5. 3. 2. 1. 「母の思い出 (二)」の概要

「母の思い出」は 1944 年 4 月 10 日、中国中央革命軍事委員会副主席の朱徳<sup>16</sup>が自分の母親を追悼するため、書いた回想文である。朱徳の幼年時代、学生時代、中国革命事業に従事した時代を通した母親の姿や言動とその人生を振り返り、母親の人徳をたたえ、母親に対する尊敬、懐かしさを記述したエッセイである。

#### 5. 3. 2. 2 分析結果

5. 1. の分析手順によって「母の思い出 (二)」を分析した結果、作品に反映された教育思想として以下の 3 点が抽出された。

1. 勤労・不撓不屈の精神：作品の中で、朱徳の母は中国の普通の労働者として描かれている。母の姿を描くことで、中国人労働者のあるべき姿を描こうとしていると考えられる。作品では、朱徳は大革命が失敗して、家族と引き離され、母は「例の三〇ムー<sup>17</sup>土地 (原文ママ) をたよりに、細腕一本で一家の生活をささえていった」。また、朱徳の母は年を取り体の調子が悪くなっても「それでもお仕事はやめられず」(『日語』第三冊第 3 課, p. 68) 「死ぬまで働きつづけた」(『日語』第三冊第 3 課, p. 67) 「一生労働から離れなかった」(『日語』第三冊第 3 課, p. 68)。朱徳の母は中国労働人民の「平凡」な一人であり、勤労のうちに、一生を過ごした。また、作品には「人手はすくなくなるし、天災にあっ

てとりいれはないし、一番みじめなときだった。それでも、母は落胆しなかった」(『日語』第三冊第 3 課, p. 65) と書かれており、朱徳の母は、いかなる困難があっても不屈の力で立ち向かう人物として描かれている。

2. 同情心：朱徳の母は意志が強い人であるのみならず、作品に「彼女の貧しい農民に対する同情と強欲非道な金持ちに対する反感が強く」(『日語』第三冊第 3 課, pp. 65-66) とあるように、貧しい人に対し、思いやりのある人である一方、正義感を持った人物であることが強調される。これらの人間性は第 3 節での高等教育機関方針で共産主義の道徳的資質としてあげられるものである。

3. 教育重視：朱徳の両親は地主や役人等の横暴に対して「自分たちの「家をささえる」ために、衣食を節約しても学のあるものを一人育て上げようと決心した」(『日語』第三冊第 3 課, p. 66)。ここから、教育は人間の現状を変え、権威から脱却し、人間の運命を変える力があるという主張が見出される。

4. 中国の革命事業を支えるものとしての母親像  
作品では母は朱徳に「生産の知識を与え」、「革命の意志を育て」、「革命への道を歩むように励ましてくれた」(『日語』第三冊第 3 課, p. 68) とあり、さらに、抗日戦争の時、「母はわたしのやっている事業を知り、中国民族解放の成功を期待するようになった」「母は、わたしたちの党の困難を知っているので、あいかわらず家で、勤勉な農婦の生活をつづけた」(『日語』第三冊第 3 課, pp. 67-68) ともあり、朱徳の母は国家の大局を念頭に置き、中国の革命事業の成功を願い、自分の子も革命者に育てようとする偉大な母親像として描かれている。朱徳の母は母親の模範的モデルとして学習者に提示される。これは 3. で取り上げた高等教育機関方針である共産主義の道徳的資質を持ち、共産党の指導や社会主義を支持するという方針と一致したものであると言

<sup>16</sup> 朱徳は 1954~1957 年中華人民共和国の副主席。当時、毛沢東に次ぐ順位にあった。

<sup>17</sup> ムーは地積単位であり、畝。中国の 1 ムーは 6.667 アール、15 分の 1 ヘクタールである。



える。

5. 言語レベルへの配慮：本作品は容易な語彙や日本語表現が使用されており、理解しやすい。「母の思い出（二）」は前作の毛沢東の「知識人の問題」と同じように中国原文から翻訳された作品であり、革命に関する語彙が多く出てくる。しかし、その翻訳の表現は「知識人の問題」と比べ、硬い表現が少なく、理解しやすい表現が多く使用され、その意味で言語レベルが配慮されていると言える。

### 5. 3. 3. 中国文学作品の分析結果

「知識人の問題」と「母の思い出（二）」の2作品の中国文学の分析から、ともに政府教育部の政治思想と教育思想に合致した人物像の育成を目指していることが共通している。「エッセイ・随筆」というジャンルでは言語レベルへの配慮がみられる。しかし、「評論」は硬い表現が多く、学習者の言語レベルより思想性の方が重視されていることがうかがえる。

### 5. 4. 掲載作品分析のまとめ

以上の作品分析から、日本文学作品においては他者への思いやりの心や感動する心を育てることに役立つ芸術性の高い作品を採用しながら、個人は集団から離れていては不幸である。あるいは団結してこそ成果があがるという集団主義・共産主義的な思想、また、人間としての人道主義的精神の必要性が内容されており、3. で検討した当時の中国の高等教育の方針と一致した思想を持つ内容の作品が選ばれていたことがうかがえた。

また、中国文学のうち、「評論・随筆・エッセイ」には、中国の政治的指導者による社会主義革命・建設を宣伝する文章や指導者の母親を顕彰する中国語原文翻訳作品が掲載され、そこではマルクス＝レーニン主義・毛沢東思想に基づき、思想性や中国政府の求める人民像が全面に出され、愛国教育や革命教育の意図が読み取れる。

言語教育と思想教育の統合については理解されやすい小中学校の作品を選ぶことで、学習者の日本語レベルに合わせており、また、作品の理解しやすさにも配慮がみられる。しかし、中国文学のうち、「評論」作品では硬い表現が多く、学習者が自然な日本語を身に付けることを阻害し、言語教育より思想性が優先されていることもうかがえる。

また、日本の小・中学校の国語教科書を使用することは学生の日本語レベルを配慮した上で、学生に生の日本語を学習させるために、日本の原文作品を選択したものととらえられる。しかし、大学生の知的レベル、さらに言えば大学生が身につけるべき・接するべき生の日本語等という点では、本当に日本の小・中学校の国語教科書が良いのか疑問である。

## 6. 総合考察

本研究では1960年代中国大学日本語専攻精読教科書に内包された教育思想を明らかにすることを目的に教科書編纂に関わる公文書の分析、教科書分析を行った。公文書分析では、中国政府はマルクス＝レーニン主義に基づく高等教育の実施を軸に、道徳心を持ち、社会、人民に奉仕する専門的な人材の育成、共産党と協力し社会主義建設事業に奉仕する人材の育成の方針を立て、教育の質の向上を目指していたことがうかがえた。この公文書に示された方針に基づく高等教育文科教材編纂においては、マルクス＝レーニン主義・毛沢東思想をもとに、掲載作品の内容が中外・古今、正面・反面のバランスを配慮した上で選択することが求められた。さらにこの高等教育文科教材の編纂方針に影響を受け、外国語教材編纂は政治思想教育の必要性を認めつつも、言語教育が直接の目的と位置付けられた。芸術性と思想性の統合も強調され、中国指導者からも文学作品を多く取り入れるようとの発言がなされていた。翻訳文より外国語原文を多く採用するという編纂方針も



あげられていた。

この公文書で示された方針と教科書『日語』分析結果を(1)思想性と芸術性(2)言語教育と思想教育の2つの観点から対照・考察する。

(1) 思想性と芸術性：教科書編纂原則は思想性と芸術性の統一に配慮することが必要であるとしていた。これに対し教科書総合分析では、題材は文学重視の傾向がうかがえた。文学では最も多いのは日本文学で15作品あり、そのうち「小説・物語」が8作品であった。具体的な2つの作品の詳細分析から、掲載作品は芸術的な点でも質の高いものであった。例えば、分析対象とした志賀直哉の作品は読者に小娘の思いやりのところを体験させるものであり、また、作品の構造からも、志賀直哉の的確な描写で読者に呼びかけ、物語に参与させ、プロットの面白さを味わうことのできる芸術性の高い作品であった。しかし、同時に、作品には学生への思想教育の意図も読み取れた。掲載作品の芸術性を重視すると同時に、思想性も重視されていたことがうかがえる。また、中国文学では「評論・エッセイ・随筆」が最多であり、特に「評論」では「知識人の問題」は芸術性より思想性を重視する傾向が読み取れる。

一方、題材として、歴史的人物伝記、「風俗習慣」に分類される作品も多く、その中には学習者への道徳的説教的なものも多くみられた。これらの作品も道徳教育的な思想性に偏っていたことを示すものと言える。

以上から、3. で検討した国家の教育方針として芸術性と思想性の統合を求められていたが、実際の日本語教科書編纂においては、題材や作品の詳細分析から、「小説・物語」には両者の統合がみられるものの、「風俗習慣」に属する作品や「評論・エッセイ・随筆」の作品は芸術性より思想性が重視される傾向にあったと言えるだろう。

(2) 言語教育と思想教育：教科書総合分析から、

掲載作品の種類、出典をみると、日本人による原文の場合では、学習者の日本語レベルに応じ、日本の小・中学校の国語教科書から日本人作家の作品集へと移行していった。中国人によって書かれた文章の場合では、学年段階に応じ、中国人教師による日本語書き下ろした文章から、中国人作家による中国語原文の翻訳作品へと変化している。このことから、『日語』（第一～三冊）では言語レベルへの配慮がなされていたことがうかがえる。

一方で、著者別にみると、日本では野坂参三等の共産党指導者、プロレタリア作家の作品が多く掲載され、中国では毛沢東、朱徳等の共産党事業に従事する人物の作品が多かった。また、出典別をみると、日中両国ともに共産党の宣伝機関紙などのものが多かった。ここから思想教育も重視されていたことがわかる。また、中国文学で最も多くみられる「評論・エッセイ・随筆」の採用作品を分析すると、言語レベルより思想性のほうが優先されていることがうかがえた。教科書編纂原則では言語教育と思想教育の関連において言語教育を主要目的とすると位置付けられていたが、教科書『日語』の編纂においては言語教育より政治思想教育を重視していたことが指摘できる。掲載作品の思想性を重視しつつも、言語教育を主要目的とするという点においては外国語教材の編纂方針の趣旨が十分に反映されていなかったと言える。

本研究から、中国の大学日本語精読教科書『日語』（第一～三冊）の編纂は、国家思想や政策から大きな影響を受け、掲載作品の言語レベル、芸術性を重視しながらも、より思想性の高い作品を通し、政治・思想教育、愛国教育も推し進めようという積極的な教育思想が読み取れる。今後は冊別の掲載作品比較を通じて学習レベルによる教科書教育思想の相違を明らかにする等のより詳細な分析も求められる。教科書編纂当事者へのインタビュー調査を合わせることで本研究結果を検証していくことも必要で

あろう。また、1970年代以降の教科書についても同様の分析を進め、中国日本語教科書に内包された教育思想の変遷を明らかにしていきたい。

## 文献

- 王冲 (2006). 中国における日本語教育——過去・現在・未来. お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ人社系事務局 (編) 『「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成』 (pp. 55-58) お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ (人社系) プログラム: 海外研修事業編. <http://hdl.handle.net/10083/721>
- 川上尚恵 (2011). 日本語教科書にみる中華人民共和国成立後の中国における日本語教育——1950～1960年代を対象として『日本語教育史論考 第2輯』 (pp. 63-76) 冬至書房.
- 木下正義, 小川直義 (2005). 日本・中国・台湾における高等学校英語教科書の題材比較研究について『JACET全国大会要綱』44, 221-222.
- 佐治圭三 (1991). 戦後中国の日本語教育. 木村宗男 (編) 『講座日本語と日本語教育 16』 (pp. 374-397) 明治書院.
- 篠崎摂子 (2006). 精読教材の本文について. 曹大峰 (編) 『日語教学与教材创新研究——日語专业基础课程综合研究』 (pp. 151-156) 高等教育出版社.
- 蘇徳昌 (1980). 中国における日本語教育 (特集: 中国における日本語教育——国別の問題点 (2)) 『日本語教育』41, 25-38.
- 孫宗光 (1994). 中国における日本語教材『日本研究・京都会議 vol.1 (「日本語教育部会」論文集)』 (pp. 80-84) 国際交流基金.
- 田中祐輔 (2013). 『中国の大学専攻日本語教育の研究——文学思想による規定と日本の国語教育からの影響』早稲田大学博士論文.

- 宮越勉 (1998). 志賀直哉「菜の花と小娘」論——第三の処女作の位相『文芸研究』80, 101-127. 北京大学 (編) (1963-1964). 『日語』 (第一～三冊) 商务印书馆.
- 陈冬生 (2001). 「大跃进」运动与中苏关系『信阳师范学院学报 (哲学社会科学版)』21(4), 107-109, 113.
- 付克 (1986). 『中国外语史』上海外语教育出版社.
- 季宸 (2014). 驳「经济问题政治化」——中苏关系破裂原因分析『黑龙江史志』17, 288-289.
- 李传松 (2009). 『新中国外语教育史』旅游教育出版社.
- 李所成 (2014). 『日語精读教材研究——以1949年以来国内出版的教材为中心』学苑出版社.
- 马叙伦 (1954). 五年来新中国的高等教育『人民教育』10, 18-20.
- 沈志华 (2013). 『冷战的再转型——中苏同盟的内在分歧及其结局』九州出版社.
- 中国教育年鉴编辑部 (1984). 『中国教育年鉴 (1949-1981)』中国大百科全书出版社.
- 中央教育科学研究所 (編) (1984). 『中华人民共和国教育大事记 (1949-1982)』教育科学出版社.
- 四川外国语学院高等教育研究所 (1993). 『中国外语教育要事录 (1949-1989)』外语教学与研究出版社.
- ## 調査資料
- 苏联专家 [http://www.china.com.cn/aboutchina/txt/2009-07/15/content\\_18139379.htm](http://www.china.com.cn/aboutchina/txt/2009-07/15/content_18139379.htm)
- 中共中央关于讨论和试行教育部直属高等学校暂行工作条例 (草案) 的指示 [http://www.china.com.cn/guoqing/2012-09/12/content\\_26747146.htm](http://www.china.com.cn/guoqing/2012-09/12/content_26747146.htm)
- 1961“高教六十条”出台 (2014年6月6日). 往事鉴『南方教育时报』多媒体数字版, 第12版 [http://szjy.sznews.com/html/2014-06/06/content\\_2899559.htm](http://szjy.sznews.com/html/2014-06/06/content_2899559.htm)

- 何东昌『文革前十七年奠定了中国特色社会主义高等教育的基础』中华人民共和国教育部 [http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe\\_1830/201310/158402.html](http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_1830/201310/158402.html)
- 陈毅 (1962). 语重心长谈外语学习——记陈毅总理对外语学生的一次谈话『外语教学与研究』 1, 1-4.
- 戴栋, 胡文仲 (编) (2009). 『中国外语教育发展研究 (1949-2009)』 上海外语教育出版社.
- 罗德里克, 麦克法夸尔 (1990). 剑桥中华人民共和国史 (1949-1965) 上海人民出版社.
- 毛泽东 (1999). 『毛泽东文集 第7卷』 人民出版社.
- 経志江 (2013). 旧植民地出身者——陳信徳. 山本経天『中日国交断絶期の日本語習得者に関する研究』 (pp. 1-15) 科研費 (21730651) 研究成果報告書. <http://id.nii.ac.jp/1099/00001288/>

## Article

# Compilation policy and educational philosophy of *Japanese Language* textbooks in Chinese universities in the 1960s: Based on a comparison between educational policy and policies of Chinese government

GONG, Lin\*

*Graduate School of Integrated Science and Art, University of East Asia, Yamaguchi, Japan**The Department of Japanese, Jia Xing University, Jia Xing, China*

## Abstract

The study was conducted on the textbook entitled *Japanese* (first to third volumes, 1963-1964), which was compiled by the Japanese Language Department, Peking University. Published in the 1960s in China, these books have been widely used in universities as Japanese intensive reading textbooks. The author analyzes the educational policy as well as policies of the Chinese government at that time, and examines the educational thoughts of the country in the 1960s. Based on the survey data and the double analysis of the textbook (comprehensive analysis and analysis of the works), it has been proved that the texts used in the Japanese textbooks are works with strong political intentions. At that time, China also emphasized political education in Japanese language education and the class nature of the texts. In addition, a majority of the selected texts that is the works meant for children because they are considered non-poisonous (have no bad effects on Chinese politics) and are in line with the national education policy of that time. The study suggests that this series of Japanese textbook selected works with political aims and ideology, neglect the principle of selecting works suitable for learners' reading ability, which is understood to be the principle of compiling Japanese textbooks. It utilized a less than ideal methodology for Japanese learners, namely that the most important thing was to understand the political and ideological nature of the work. The Japanese textbook, published in 1960's influenced Japanese textbooks in the later times. The author explored the educational ideas presented in the Japanese textbooks of the 1960s, and this has great practical and historical significance.

Copyright © 2017 by Association for Language and Cultural Education

*Keywords:* Japanese language education in China; Japanese intensive reading text books; national policies; characteristics of topics/genres; compilation policies

---

\* E-Mail: gonhlinlin1@163.com